

8/27 18:00-21:00 オンライン開催

川村文化芸術振興財団SEA助成公募説明会&シンポジウム 「コロナ時代における、ソーシャリー・エンゲイジド・アートの新地平」

ソーシャリー・エンゲイジド・アート（SEA）とは、積極的に社会と関わり、参加・対話のプロセスを通じて、人々の日常から既存の社会制度にいたるまで、何らかの「変革（change）」をもたらすことを目的としたアート活動を総称するもの。

しかしいま全世界を覆うコロナ危機においては、集まること、対話すること、移動することが感染拡大リスクとなり、SEAの活動も大幅な制限を受けています。と同時に、この制限をマイナスとのみ捉えるのではなく、人々がこれまでとは異なる方法で社会に関与し変革をもたらす契機とすべく、様々な試みが世界各地で始まっています。

ウイルスや災害などリスクを抱えつつも持続可能な社会や、人間以外の事物との共存・調和を目指す生態系、それらを実現させる新たな社会モデルの実験と発明。2021年度のSEA助成は、コロナ時代の社会課題に取り組むアートプロジェクトのプランを広く公募し、10件程度を目安に採択、実現に向けたプロセスをサポートします。

当シンポジウムでは、コロナ時代において切り拓かれるべきソーシャリー・エンゲイジド・アートの新たな地平について、これまでの助成対象アーティストや外部論客を交え、理念・創作プラン・現場を横断しながら議論します。

2020年8月27日（木）18:00-21:00 オンラインで開催

【第一部】イントロダクション 18:00-18:15

ご挨拶：川村喜久（一般財団法人 川村文化芸術振興財団理事長）

2021年度ソーシャリー・エンゲイジド・アート助成の説明

窪田研二（キュレーター／川村文化芸術振興財団理事）

2021年度ソーシャリー・エンゲイジド・アート支援助成公募開始にあたり、本助成のビジョンと特徴に加え、コロナ時代に対応した2021年度助成の新規変更点について詳細を説明します。応募を検討されるアーティストや団体の皆様はぜひご覧ください。

【第二部】報告プレゼンテーション 18:15-19:15

「コロナ禍におけるソーシャリー・エンゲイジド・アートの実践事例」

コロナ後に国内外で行われたSEAのアートアクションをまとめて紹介。Black Lives Matterへの応答やオンラインで展開されたプロジェクトなど先行事例を通じて、コロナ禍におけるSEAの輪郭を浮かび上がらせてみます。

・プレゼンター：毛利嘉孝（東京藝術大学教授／SEA助成審査員）

これまでのSEA助成受賞アーティストによるプレゼンテーション

過去3か年でSEA助成対象となったプロジェクトについて、その思想と実践についてお話頂きます。

- ・高山明（演出家、Port B主宰／2018年度SEA助成対象者）
- ・琴仙姫（クム・ソニ）（アーティスト／2019年度SEA助成対象者）
- ・きむらとしろうじんじん（アーティスト／2020年度SEA助成対象者）

休憩（15分）

【第三部】ディスカッション 19:30-21:00

討論「コロナ時代における、ソーシャリー・エンゲイジド・アートの新地平」 100分

コロナ禍で全世界の人々や振る舞いや生活環境、社会状況が激変する中、SEAの芸術実践における新たな課題を抽出し、あらたなビジョンを探ります。Black Lives Matterなど世界中で可視化される運動とそこに現れない差別や分断に対し、芸術はいかなり方法でコミットし社会変革を仕掛けることが可能なのか。コロナ禍において「社会的にエンゲイジドする（参加する）」意味と形はいかに進化させられるのか。コロナおよびBLMの激震地であるニューヨークの事例も交えながら、多面的に議論します。

- ・エキソニモ（アーティスト／NY在住）
- ・高山明（演出家、Port B主宰／2018年度SEA助成対象者）
- ・琴仙姫（クム・ソニ）（アーティスト／2019年度SEA助成対象者）
- ・きむらとしろうじんじん（アーティスト／2020年度SEA助成対象者）
- ・相馬千秋（アートプロデューサー／SEA助成審査員）
- ・毛利嘉孝（東京藝術大学教授／SEA助成審査員）

司会：窪田研二（キュレーター／川村文化芸術振興財団理事）

【参加方法】

無料／要・事前申込（先着300名）

Googleフォームよりお申込みください。前日までに配信リンクをお送りします。



https://docs.google.com/forms/d/e/1FAIpQLSf82I2FvIVsuEImxlPzB6JgWAu5KeBoA2VqkKEYrPtVTg2Jw/viewform?fbclid=IwAR0yTtvkvEGvTymqOsqSoy_highbWHUIFoH-fiwGjka_TZg-n3qHQwPhb2VI

主催：一般財団法人 川村文化芸術振興財団

企画・制作：NPO法人芸術公社

配信協力：有限会社ネオローク

登壇者プロフィール

エキソニモ（アーティスト／NY在住）

怒りと笑いとテキストエディタを駆使し、さまざまなメディアにハッキングの感覚で挑むアートユニット。千房けん輔と赤岩やえにより、1996年よりインターネット上で活動開始。2000年より活動をインスタレーション、ライブ・パフォーマンス、イヴェント・プロデュース、コミュニティ・オーガナイズなどへと拡張し、デジタルとアナログ、ネットワーク世界と実世界を柔軟に横断しながら、テクノロジーとユーザーの関係を露にし、ユーモアのある切り口と新しい視点を携えた実験的なプロジェクトを数多く手がける。国内外の展覧会やフェスティバルで活躍。2006年《The Road Movie》がアルス・エレクトロニカ ネット・ヴィジョン部門でゴールデン・ニカ賞を受賞。2010年に東京TDC賞で《ANTIBOT T-SHIRTS》がRGB賞を受賞。2012年よりIDPWを組織し「インターネットヤミ市」などを手がける。2015年よりニューヨークに拠点を移す。

高山明（演出家、Port B主宰／2018年度SEA助成対象者）

1969年生まれ。演出家・アーティスト。演劇ユニットPortB(ポルト・ビー)主宰。既存の演劇の枠組を超え、実際の都市を使ったインスタレーション、ツアー・パフォーマンス、仮設の「学校」、社会実験プロジェクトなど、現実の都市や社会に介入する活動を世界各地で展開している。近年では、美術、文学、観光、建築、教育といった異分野とのコラボレーションに活動の領域を拡げ、演劇的発想を観光や都市プロジェクト、社会実践やメディア開発などにも応用する取り組みを行っている。

琴仙姫（クム・ソニ）（アーティスト／2019年度SEA助成対象者）

アーティスト、映像作家。東京生まれ。2005年カリフォルニア芸術大学 映像科 修士課程修了。2011年東京芸術大学先端芸術表現領域 美術博士課程修了。2011年より2015年まで韓国の延世大学などで非常勤講師として働きながら、ソウル文化財団からの支援を受け脱北者たちとのアートプロジェクトを推進。2016年から2017年までポーラ美術振興財団在外研修員としてロンドンにて研修。Live Art Development Agencyではリサーチ・アーティストとして、キングストン大学 芸術・建築・デザイン学科では研究員として在籍。2017年からインドの古典音楽に伝わるラーガ療法を体得するために北インドのプリンダヴァンにて研修。

きむらとしろうじんじん（アーティスト／2020年度SEA助成対象者）

1967年新潟県生まれ、京都府在住。京都市立芸術大学大学院美術研究科で陶芸を学ぶ。1995年より「野点--焼立器飲茶美味窯付移動車」を全国各地で開催している。2008年には、参加者がオリジナルの屋台を制作し、各々の「魅力の予感」をまちの路上に持ち出す「野点2008+妄想屋台祭り」を水戸芸術館主催で水戸市内各所で開催。2010-2013年度には東京アートポイント計画の一環として、一般社団法人「谷中のおかって」とともに東京都台東区谷中界隈を舞台にこども創作教室「ぐるぐるミックス」の立ち上げに関わり、2016年からは、東京都による芸術文化を活用した被災地支援事業の一環として、岩手県の「かまいしこども園」でも活動を展開している。また、2015年からはブレーカープロジェクトとともに廃校となった小学校を活用した地域に開かれた創造の場づくり「作業場@旧今宮小学校」に取り組んでいる。

相馬千秋（アートプロデューサー／SEA助成審査員）

国際舞台芸術祭「フェスティバル/トーキョー」初代プログラム・ディレクター (F/T09春～F/T13)、横浜の舞台芸術創造拠点「急な坂スタジオ」初代ディレクター (2006-10年)、文化庁文化審議会文化政策部会委員(2012-15年)等を歴任。

国内外で舞台芸術を中心としたプロデュースやキュレーションを多数行っている。2015年フランス共和国芸術文化勲章シュヴァリエ受章。2016年より立教大学現代心理学部映像身体学科特任准教授。2017年に「シ

アターコモンズ」を創設、現在に至るまで実行委員長兼ディレクターを務めている。2019年には「あいちトリエンナーレ2019」のパフォーミング部門のキュレーターも務めた。

毛利嘉孝（東京藝術大学教授／SEA助成審査員）

専門は社会学・文化研究。特にメディアや文化と政治の関係を考察している。京都大学経済学部卒。ロンドン大学ゴールドスミス・カレッジ MA（メディア&コミュニケーションズ）、同PhD（社会学）。九州大学大学院助手・助教授を経て現職。2002～2003年ロンドン大学客員研究員。Inter-Asia Cultural Studies（Routledge）編集委員。

主著に『文化＝政治：グローバリゼーション時代の空間の叛乱』（月曜社、2003年）、『ポピュラー音楽と資本主義』（せりか書房、2007年）、『ストリートの思想：転換期としての1990年代』（NHK出版、2009年）、『バンクシー：アート・テロリスト』（光文社新書、2019年）など。

窪田研二（インディペンデント・キュレーター）

上野の森美術館、水戸芸術館現代美術センター学芸員を経て2006年よりインディペンデント・キュレーターとして活動。2008年よりKENJI KUBOTA ART OFFICE 代表。2012-2016 筑波大学芸術系准教授として創造的復興プロジェクトに参加。政治、経済、教育、行政といった社会システムにおいてアートが機能しうる可能性を、アーティストや大学、企業などと協働し、様々な文化的フォーマットを用いて試みている。

「X-color グラフィティ in Japan」（水戸芸術館現代美術センター、2005年）、「マネートーク」（広島市現代美術館、2007-2008年）、「Twist and Shout（BACC バンコク、2009-2010年）、「六本木クロッシング 2010-芸術は可能か？」（森美術館、2010年）、「Don't Follow the Wind」（福島県帰還困難区域内某所、2015年-）、「黄金町バザール 2017」（横浜市黄金町、2017）、「第6回 Asian Art Biennale - Negotiating the Future」（国立台湾美術館、2017）他、国内外の展覧会キュレーションを多数手がける。

2009年より一般社団法人アートアンドパブリック協会 理事、2017年より一般財団法人川村文化芸術振興財団 理事。